

長崎・平戸から始まった「オランダ商館ヘリテージネットワーク」、東インド会社の旧アジア拠点を結ぶ



2017年の年次総会で平戸に集ったオランダ商館ヘリテージネットワークのメンバー ©平戸オランダ商館

17世紀の大航海時代、オランダは世界の海を制し、東インド会社（VOC）を通じてアジア各地に交易の拠点を築きました。長崎の平戸や出島だけでなく、インドネシア、マレーシア、タイ、台湾など各地に残る VOC の旧拠点は、今も重要な文化遺産として息づいています。こうした拠点を結び、400年の時空を超えて人と文化をつなぐために設立されたのが「オランダ商館ヘリテージネットワーク」です。

負の歴史も含む、東インド会社の遺産

オランダ商館ヘリテージネットワーク結成の発起人となったのは、平戸オランダ商館の岡山芳治館長でした。平戸は1609年にオランダ人が日本で初めて入港したところで、33年間に渡り、アジア・ヨーロッパ間を結ぶ重要な拠点となってきましたが、幕府の外国統制政策により同地の倉庫は破壊され、1641年には長崎の出島に交易の拠点が移されました。岡山氏によると、平戸オランダ商館を復元・公開したことがネットワーク形成のきっかけとなったといいます。

「2011年によりやくオランダ商館の復元が完成して、私たちは学芸員としてこの商館を運営するようになりました。そんな中、アフリカからアジアにかけてたくさんの拠点を持っていた東インド会社（VOC）を研究するにあたり、それらの地域との関係を研究する必要性に迫られたわけです。世界史的な視点で考えるときに、日本の資料だけではどうしても情報量が足りないということで、情報交換や人の交流、歴史的認識の共有を目的にネットワークを作る提案をさせていただきました。」（岡山氏）



1639年に築造されたオランダ商館の復元が2011年に完成。公益財団法人・松浦史料博物館が指定管理により運営開始 ©平戸オランダ商館

ネットワーク設立に先駆けて2014年に平戸で開かれた事前会議では、日本の平戸と長崎のほか、インドネシア、マレーシア、タイ、台湾が参加しました。当初は、このネットワークの名称が「VOCヘリテージネットワーク」とされる予定だったといえます。しかし、オランダの植民地であったインドネシアなどでは、VOCはネガティブな感情を抱かせるものでもありました。

インドネシアのメンバー代表である建築資料センター・エグゼクティブディレクターのナディア・プルウェストリ氏は、当時の様子を振り返ります。「事前会議で、私はインドネシアからの唯一の参加者でした。平戸から帰国後、インドネシア国内の文化関連のコミュニティリーダーや、これまで遺産保全活動に関わってきた関連機関とこのネットワーク設立について意見交換を行ったところ、『VOC』という言葉が『ダッチ・トレーディング・ポスト（オランダ商館）』に変更すべきだという提案がなされました。その結果、翌年にジャカルタで開催された第2回会合で、ネットワークの名称は『オランダ商館ヘリテージネットワーク』に正式決定されました。」

はじめは気軽に提案した名称について、異なる意見が出たことも日本側には大きな気づきになったといえます。岡山氏は、「VOCに対する感情ひとつにしても、各国で歴史的な認識がぜんぜん違います。その地域にしかわからない歴史や遺産もたくさんあるわけで、そういうところを互いに共有して研究を進めていくのが必要だな、と思いました」と述べています。

アジア9カ国の専門家が結集、多様だから深まる理解

一口に「オランダ商館」といっても、その歴史的背景は様々です。日本では、江戸幕府から許された拠点で交易が行われていましたが、インドネシアのジャカルタなどでは、町や地区

全体が VOC により破壊・再建され、現在も市庁舎や倉庫、住宅などが残っています。また同国バンダ諸島では、住民の意志に反して香辛料の独占交易を求めた VOC により、住民の 90% が殺害、奴隷化、追放されたという歴史があり、その出来事は今日に至るまでインドネシアの人々に深い傷跡を残しています。

VOC は次々と新しい拠点を征服しましたが、同時に他の地域からは追い出されることもありました。この複雑な歴史は、有形・無形の両面で豊かな文化遺産を生み出しています。

VOC のアジア内貿易によって、各地域も互いに影響を与え合いました。これまで、VOC の歴史については、ほとんどオランダと現地住民との関係に焦点が当てられてきましたが、オランダ商館ヘリテージネットワークの形成により、アジア各地の相互関係についてもスポットライトが当てられるようになってきました。



「新刻世界地図」（17 世紀） 松浦史料博物館所蔵

同ネットワークのメンバーは当初の 5 カ国 6 地域から、インド、スリランカ、バングラデシュ、ミャンマーが加わり、現在は 9 カ国 18 地域に増えています。地域の多様性のみならず、メンバーの専門性もさまざま。歴史家、学芸員、建築家、都市計画家など多くの専門家が集まり、学際的な研究や、VOC 遺産の修復・保存活用などで協力しています。

2014 年に第一回の総会を開いて以来、メンバーは毎年、ネットワーク内の 1 地域に集まり、年次総会を開いています。そこでは毎回、各地域の代表によるプレゼンテーションが行われ、各地の研究結果や活動の最新動向が報告されるほか、現地の遺跡視察やワークショップが行われたりしています。これまでは平戸、長崎、ジャカルタ、アユタヤ（タイ）、台南（台湾）、マラッカ（マレーシア）などで総会が開催されました。また、直近では 2025 年に大阪・関西万博のオランダパビリオンでも同会が催されています。

プルウェストリ氏によれば、年次総会は新しい人々と出会い、それぞれの都市におけるオランダ交易拠点の捉え方や、それが今日の歴史認識や暮らしとどのようにつながっているのかについて、理解を深めることができる貴重な機会です。「毎回、常に新しい気づきがあります」と述べています。



2025年、大阪・関西万博のオランダパビリオンで開催された年次総会 ©駐日オランダ王国大使館

オランダ政府は「オブザーバー」

一方、オランダはこのネットワークのメンバーではなく、集会に関してもオランダがイニシアティブを取ることはありません。ただ、各地のオランダ大使館を通じて、参加費用や会場提供などで同ネットワークをサポートしています。オランダ教育・文化・科学省の傘下組織であるオランダ文化遺産庁のジャン・ポール・コルテン氏は、同ネットワークの設立について、「私たちにとって嬉しい驚きでした」と語ります。

「ネットワークは彼らの自発的な活動であり、私たちはその取り組みを歓迎しています。VOCの遺跡はもはや私たちの所有物ではありませんし、私たちはそれらの遺産に対して、いかなる権利主張もしていません。ただ、それらは私たちの歴史の一端を物語るものでもあります。その意味で私たちは関心を持っており、ネットワークを支援し、協力したいと思っています。」（コルテン氏）



2019 年、マレーシアのマラッカで開かれた年次総会 ©平戸オランダ商館

オランダ商館ヘリテージネットワークの会合に、オランダ文化遺産庁はしばしば「オブザーバー（発言権のない参加者）」として参加しています。また、同ネットワークの要請に応じて、同庁の専門家が講演を行ったり、ワークショップを実施したりすることもあります。第一回目の年次総会をはじめ、複数の会合にオブザーバーや講師として参加したジンナ・スミット氏は、同ネットワークの意義について、次のように語っています。

「文化遺産庁は、二国間および多国間のプロジェクトを促進しています。複数の国が参加するプロジェクトでは、こうした活動を通じて専門家同士が互いを知るようになることが多いのです。しかし、今では彼ら自身がネットワークを形成しているので、オランダが関与する必要はありません。知識や専門性、つながりを見つけるために、彼らはオランダではなく互いに目を向けています。そこに、このネットワークの大きな価値があると思います。」

それでも **2022** 年にはオランダがホストとなり、アムステルダムでシンポジウムを開催しました。インドネシア、インド、スリランカ、マレーシア、台湾、タイ、日本からのメンバーが出席し、各地の活動や今後の課題などについての報告を行いました。こうした情報交換を通じ、オランダ政府も自らの歴史について、より包摂的な理解を得ることができるのです。



2015 年、ジャカルタでの現地研修の様子 ©平戸オランダ商館

楽しい文化の交差点、スイーツやアートイベントも

年次総会のほかにも、ネットワーク内のいくつかのメンバーが集まって、ワークショップや展示会を開催することもあります。

近年では 2024 年に台湾・台南で、「砂糖産業遺産」をテーマとしたワークショップと展覧会が開催されました。参加メンバーは、台南、安平（台湾）、平戸、ジャカルタ。そこでは台南とジャカルタの製糖史や、平戸の砂糖貿易と菓子文化を伝える菓子図巻が展示されたほか、オランダ人アーティストと平戸の菓子店が作った新しいスイーツの展示や和三盆を使った和菓子づくりのワークショップなどもありました。

また、2025 年にはジャカルタと台南が共同で、インドネシア・西スマトラ州コト・ガダンにおいて、「農村文化景観」に関するワークショップを開催しました。ここでは、コト・ガダンの遺産や地域の自然・文化・伝統など、すでにあるものを現代に活かす地域開発の形が考察されました。



台湾・台南市博物館における「砂糖産業遺産」をテーマとしたイベントの展示 ©平戸オランダ商館

「歴史だけでなく、今につながる活動なんです。こうした活動を通じて、メンバーも今はもう友達感覚で、本当にいい仲間になっています」と、岡山氏は述べています。

今年の年次総会は、インドネシアのテルナテで開催予定。このほかにもインドネシア、台湾、オランダ、日本人のアーティストを平戸に呼んで、「凧と竹の文化」をテーマに作品を製作・展示する「アーティスト・イン・レジデンス」や、台湾・淡水におけるオランダ商館ヘリテージネットワークに関する展覧会などが予定されています。

かつて VOC によって結ばれたアジアの拠点は、今あらためて人と人、地域と地域を結びなおしています。歴史のネガティブな側面も包括しながら、未来を見据えた活動を展開する同ネットワークは、文化遺産を持続可能で包摂的な協働へと転換する、ひとつのモデルになり得るのではないのでしょうか。